



2006年7月発行

神の愛

「わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしては、いけないのか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。」(マタイによる福音書20章 1～16節)

或る時主イエスは、天の国について、“ぶどう園の労働者”の譬えをもって、語られました。天の国とは、所謂天国、即ち死後の世界のことでなく、神の愛が働く所のことで、同じ家庭でも、仲良くすれば天国になり、憎しみ合えば地獄になるように、神の愛が働く所では、地上にありながら、既に天国を味わうことが出来るのです。

譬えの粗筋はこうです。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行き、1日1デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送りました。同じように9時にも、正午にも、午後の3時にも、そして何と日暮れ直前の5時にも、主人は広場に出かけて行って、まだ何もせずに立っている者たちを見つけると、彼らをも雇い、ぶどう園に送ったと言うのです。ぶどうの収穫期で、猫の手も借りたいほど忙しかったのでしょう。1日の労働が終り、賃金が支払われることになりました。この時主人は、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで、皆一様に1デナリオンずつ支払いました。最初に来て、炎天下1日働いた者は、この主人の扱いに大いに不満を抱き、「不当だ！」と激しく文句を言いました。この時、主人が口にしたのが、前掲の言葉です。この主人が、神を指していることは明らかです。

ところで、殆んど1日広場に立っていて、日暮れ直前、ようやく仕事を果たした者は、何も好き好んでこうしていたわけではなく、誰も雇ってくれる者がいなかったからなのです。と言うことは、病弱であったか、他に何らかのハンディキャップを負っていたか、要する

に労働力としては評価されなかったからなのです。人間社会では、働かないとみなされれば、切り捨てられるか、場合によっては、人格さえも否定されかねないのです。しかし神様は、働きのある者と全く同じように、一人の尊い人格として、御自分のぶどう園、即ち教会に招き、用いようとしてくださるのです。そして、どんなに小さな働きでも、評価し、喜んでくださるのです。

彼が働いて得た1デナリオンとは、当時の労働者が1日働いて手にした、正当な賃金で、労働者は、此れで家族を養い、生活の一切を賄ったのです。もし主人が、「お前は1時間しか働かなかったのだから、1時間分しか支払わない」、と言ったとすれば、彼と彼の家族は、十分に食事が摂れず、その日は空腹に堪えねばならなかったのです。主人はそのことを知っていたので、自分が損をしてでも、彼と彼の家族が生きて行けるように、1デナリオンを支払ってやったのです。正にそのように、神は、御自分の利益や都合から、私たちのことを考えるのではなく、何処までも私たちの身を案じ、私たちがよりよく生き得るようにと、心を砕いてくださるのです。

この譬えの主人は、夜明けを待ちかねたように、人を求めて自ら広場に出かけて行きました。しかもそれを、9時、12時、3時、5時と、幾度も繰り返しています。向こうから職を求めてやって来るまで、黙って待っているのではなく、主人の側から、しかも召し使いを使わずに、自分から出かけて行くのです。その熱心、その積極性こそ、イエス・キリストに現われた神の愛の姿だ、と言ってよいのではないのでしょうか。父なる神は、御子イエス・キリストを此の世に送り、私たちに御許に招こうとしてくださったのです。それだけではありません。私たちに罪より贖うために、御子イエス・キリストを十字架につける、と言う大なる犠牲まで払われたのです。神の愛は、此処に極まりました。

牧師 三輪恭嗣

(2006年5月28日の礼拝説教より)